

2 Toin (Heijyokyo) Nara Period Nara City Tel:0742-34-3931

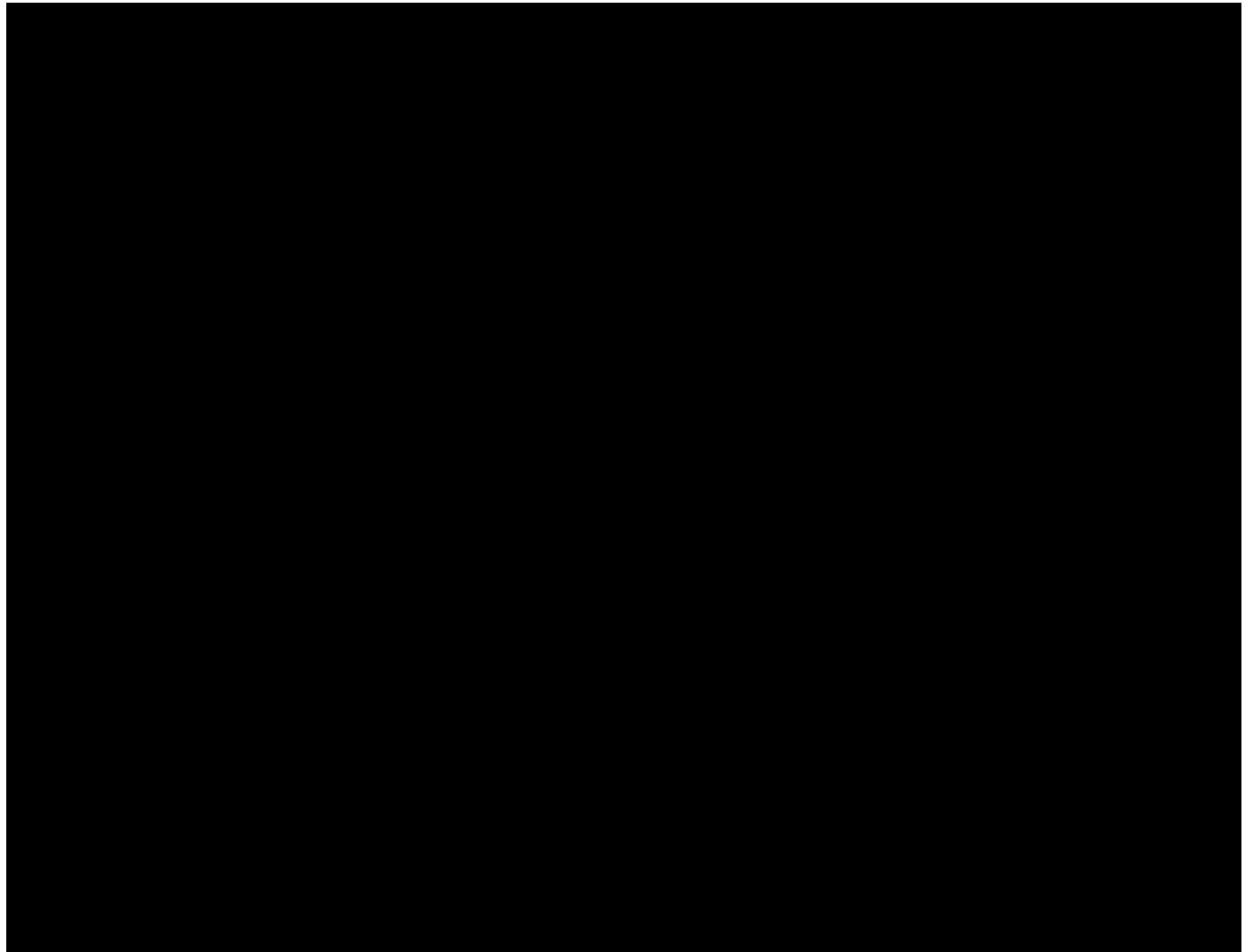
当庭園は余り知られていない。それは昭和42年に発掘され、埋め戻しその後復元され平成10年から一般公開されたばかりである。しかしその内容はすばらしく、その後の日本庭園の基礎になっている。「庭園は京都」と、思われがちであるが、この他の庭園も合わせて拝観すると「日本の庭園の源流は奈良から」がよく理解できる。今後更に多くの庭が発掘されるであろう。またこの時代の庭園は新羅の雁鴨池、唐の太液池などの影響を直接受けているので、これらの庭園と合わせて考察する必要がある。

さてこの庭は750年頃の天平時代に作られた。当初は直線の多い池であったが、その後の改造で出入りの多い汀線の池になった。庭の構成は池の汀は総て礫石が敷かれ、中央に中島があり、宴を催す客殿のある出島、それと須弥山石組みにより構成されている。

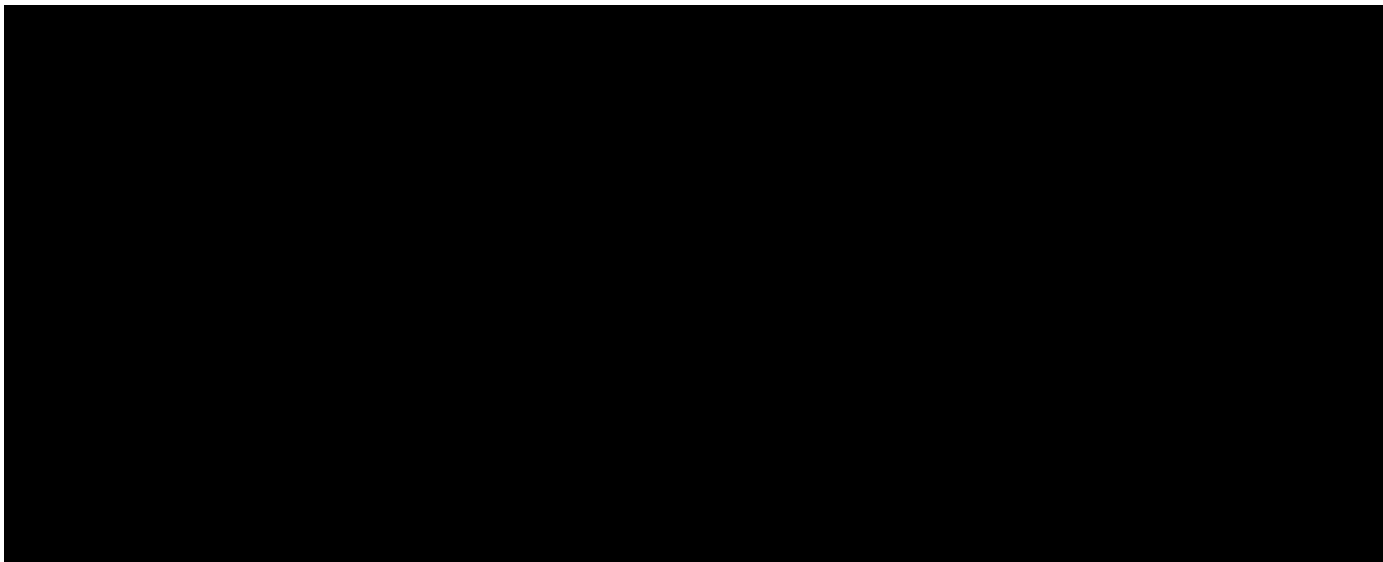
この庭園のポイントは

- ①最新の思想として極楽浄土の思想が既に奈良時代に入っていたことが示されている。
- ②反り橋、平橋は平安時代の寝殿造りからの影響ではなく、その源流は中国の極楽浄土思想からの影響と思われる。日本庭園には反り橋が多く用いられていた(永保寺、苔寺、金閣寺、銀閣寺など)。

この庭園を現代の目で見たらどのように写るだろうか。このような抽象芸術ともいえる庭園を見ると、庭園は単に自然を縮小したものではなく、理想の世界を抽象的なイメージで再現したものだといえる。自然そのものは回りに溢れている、それを箱庭的に縮小コピーしても自然に負けるに決まっている。となると、庭園とは自然のポイントを抜き出して、新しい理想の世界を作り出したものとなる。



宴会の行われる正殿とテラス 出島、中島、洲浜の全てが栗石で覆われている。その先端には景石が置かれ、まさに現代抽象庭園だ。玉石が全面に敷き詰められ、きれいな汀線が描かれている。所々にある景石はやや小さめに見えるが、それは玉石が本来のものを保存するために数十センチメートル高く改築されているからだ。



正殿から見た須弥山石組　すでにこの時代に抽象化した洲浜と空想の世界の須弥山石組がなされていることに驚く

正殿南側の護岸は総て栗石による洲浜と出島で覆われている。選り抜かれた石が護岸に変化を与えている。

